

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ

1 教科全般における指導法の工夫

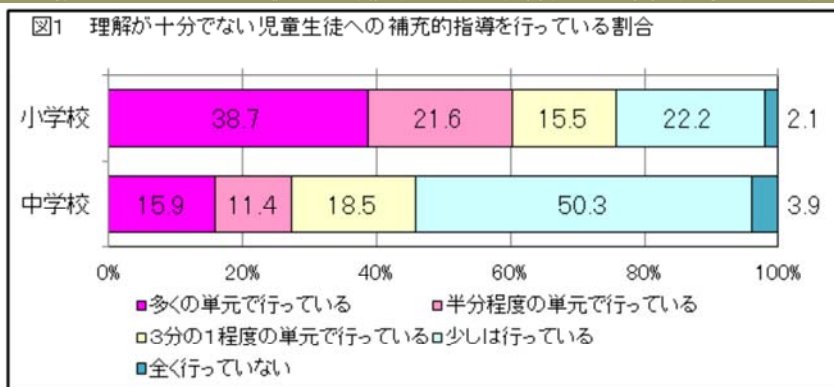
- 発展的な課題については、児童生徒の実態や学習の内容に応じて適宜取り入れていくことで効果が上がると考えられる。
- 表現する活動については、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することで効果が上がると考えられる。
- 単元の学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や指導計画に取り入れて指導を行っている教師の割合は高い。

この節では、

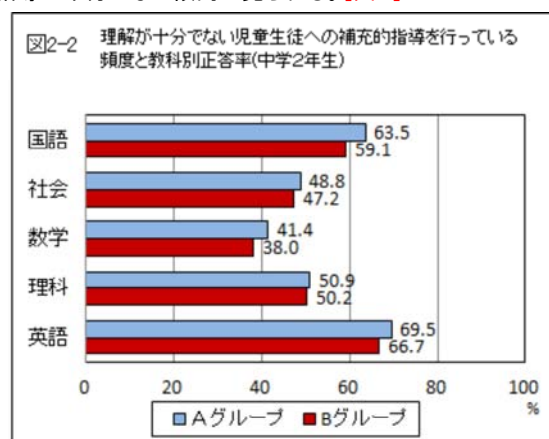
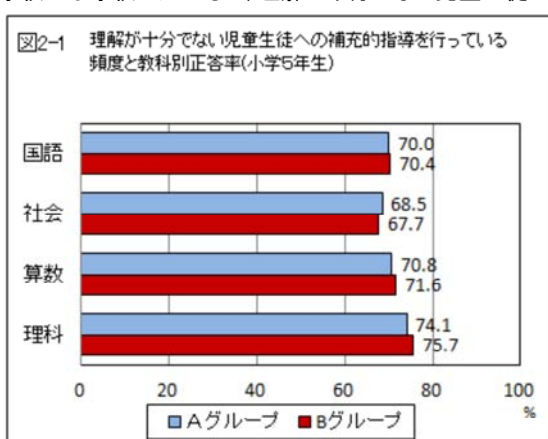
- ・理解が十分でない児童生徒への補充状況
- ・表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業
- ・身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導
- ・学習形態を工夫したメリハリのある授業
- ・PDCAサイクルを踏まえた実践

の設問から、補充的指導、表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習形態の工夫などの状況について分析する。

ア「理解が十分でない児童生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか」について

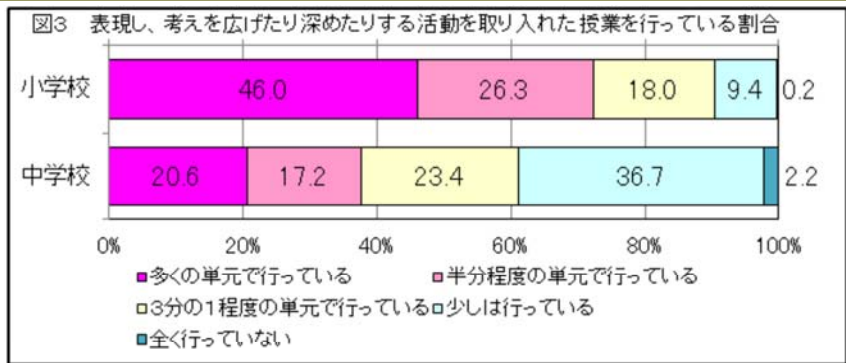


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は60.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は27.3%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は54.2%と過半数を超えている。中学校は小学校に比べると、理解が十分でない児童生徒に対しての指導が十分でない傾向が見られる。[図1]

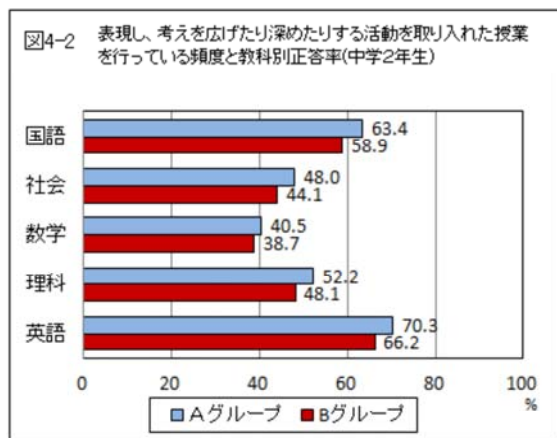
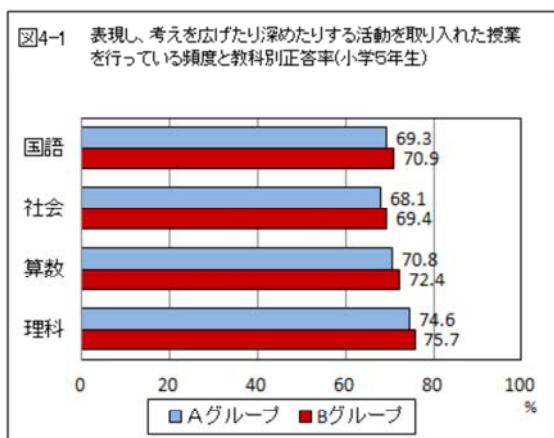


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、理解が十分でない児童生徒に対して、細やかな指導を行ってきたことの効果の表れと考えることができる。[図2-1][図2-2]

イ「発表や話し合い活動などを表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」について

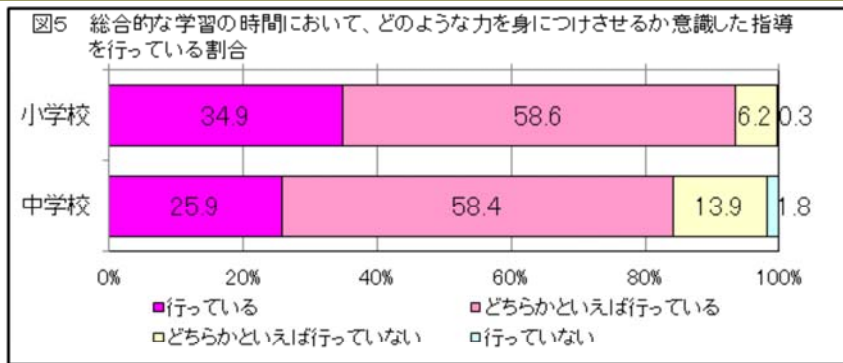


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は72.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は37.8%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は38.9%となっている。中学校は小学校に比べると、発表や話し合い活動など、表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業への意識が低い傾向が見られる。[図3]

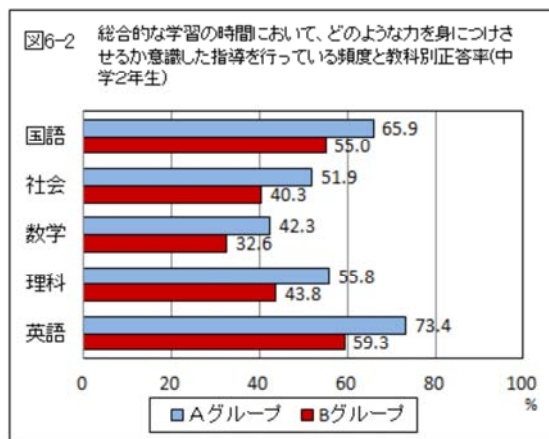
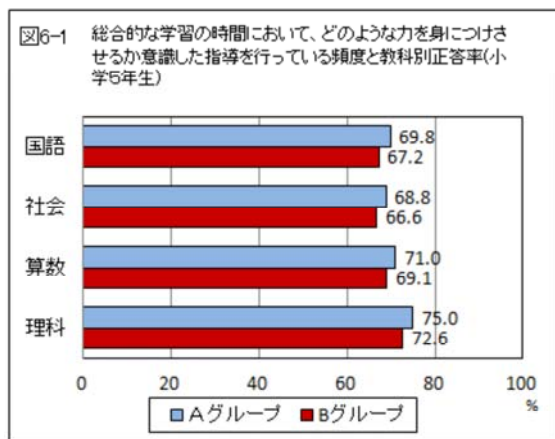


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、自分の考えを表現させることで、考えたことを整理させたり共有化を図らせたりしてきた効果の表れと考えることができる。[図4-1][図4-2]

ウ 「総合的な学習の時間においては、児童生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識した指導を行っていますか」について

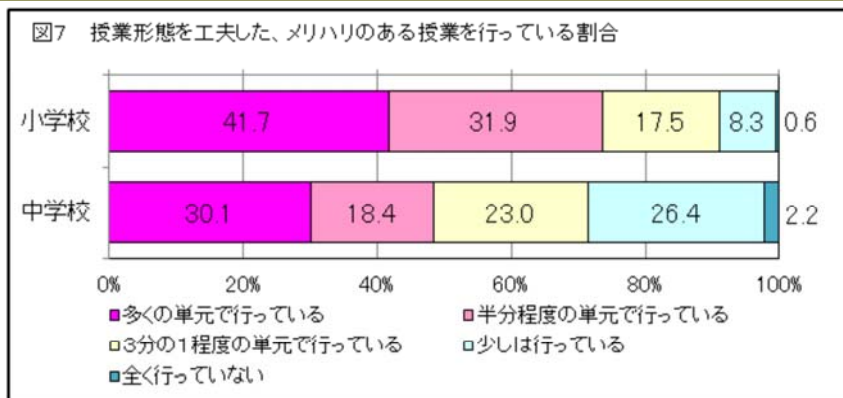


「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答をした小学校教師の割合は93.5%である。同じ回答をした中学校教師の割合は84.3%である。小学校と中学校ともにほとんどの教師が、総合的な学習の時間においては、児童生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識して指導を行っていることが分かる。【図5】

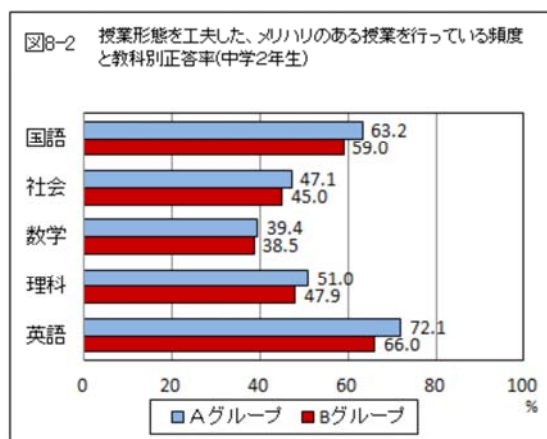
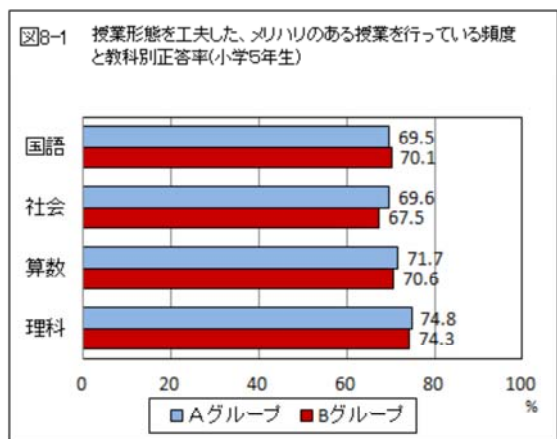


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。中学校でも全ての教科においてAグループの平均正答率が高く、どの教科も10ポイントほど上回っている。【図6-1】【図6-2】

エ 「教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか」について

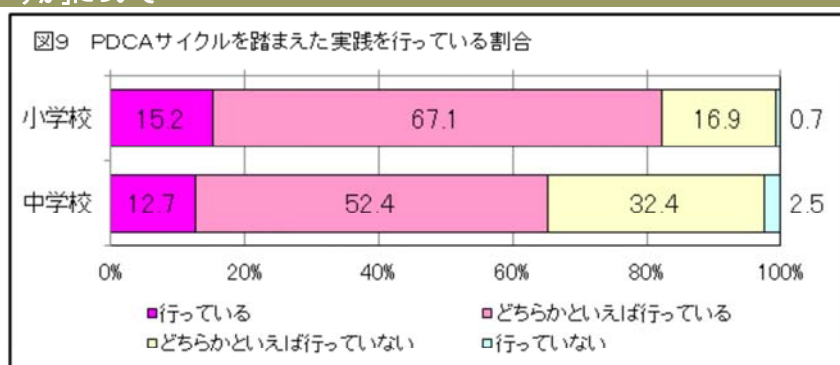


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は73.6%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は48.5%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は28.6%となっている。中学校は小学校に比べると、教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面と、グループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業への意識が低い傾向が見られる。【図7】

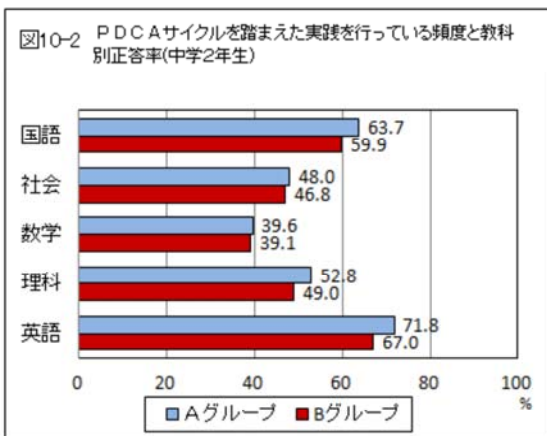
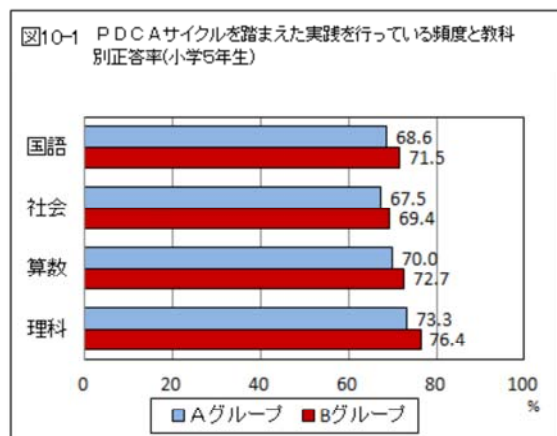


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において同程度、または、Aグループの平均正答率が高くなっている。中学校でも全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、英語において顕著に表れている。[図8-1][図8-2]

オ「日常の授業や単元等の指導、学校における教育活動において、PDCAサイクル(計画→実施→評価→改善)を踏まえた実践を行っていますか」について



「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答をした小学校教師の割合は82.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は65.1%である。中学校は小学校に比べると、PDCAサイクルを踏まえた実践への意識が低い傾向が見られる。[図9]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、計画的な実践と、取り組んだ結果からの改善を図ってきた効果の表れであると考えられる。[図10-1][図10-2]

○ これからの指導に向けて**学習活動の形態を工夫した授業**

授業の中において、ペアでの活動やグループでの活動を設定し、児童生徒に自分の考えを伝える機会を与えることは、児童生徒一人一人に発言機会を保證することになるだけでなく、他者に伝えるために自分の考えを整理したり、他者と比べることで、考え方が広がりたりする効果が期待でき、また、児童生徒の言語能力や表現力を高めていくことにもつながっていく。ただ、一方でその基盤となる基礎的・基本的な知識・技能の定着が低下するといった悪影響も考えられる。そのため、知識や技能を習得させる際に教師主導による学習活動の形態をとったり、知識や技能を活用させる際にお互いの考えを伝え合う学習活動の形態をとったりするなど、授業の目的や学習内容に応じて、より効果を上げるための教師側の授業の進め方の工夫が求められる。

身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間における指導

今回の調査結果から、総合的な学習の時間において、身に付けさせたい力を意識した指導を行うことによって、児童生徒の教科における学力の向上にも、よい影響を与えていることを確認することができた。学習指導要領において、総合的な学習の時間については、各教科等を横断する課題について問題解決や探究的な活動を行うことにより、児童生徒の思考力・判断力・表現力を育むとともに、各教科における基礎的・基本的な知識・技能の習得にも資するなど教科と一体となった指導が求められている。今後も、総合的な学習の時間については、これらのことを各学校や各教師が意図しつつ、指導計画や学習内容を考えながら取組の充実を図っていくことが大切である。中央教育審議会の答申(平成20年1月17日)[※1]においても、総合的な学習の時間の学校間、学校段階間の取組の実態に差があることを課題としており、学校としてのカリキュラムマネジメント能力の向上が求められている。学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間の縮減はあるもののその重要性については、更に強調されることとなる。各学校におけるカリキュラムマネジメント能力の向上が大いに期待されるところである。

※1 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改善について」(答申)
平成20年1月17日 ⑩総合的な学習の時間(130ページ～132ページ)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ

2 学習環境の活用

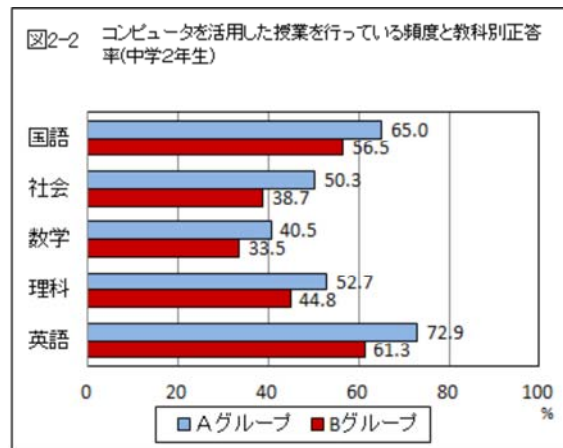
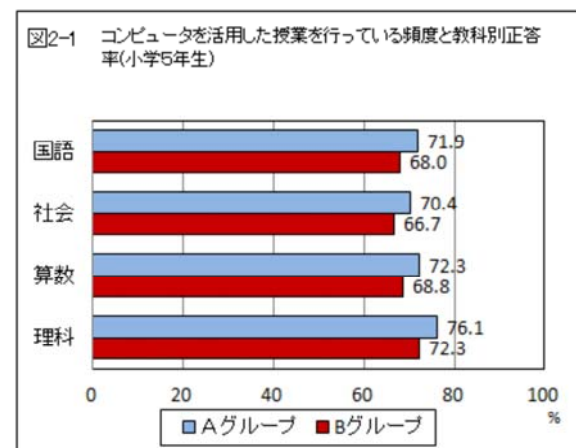
- 授業におけるコンピュータと学校図書館の活用頻度や活用内容には、小中学校の違いが見られる。[図1][図3]
- 小学校と中学校ともに、コンピュータを活用した授業を行っている学校ほど、正答率が高くなる傾向が見られる。今後も各授業におけるコンピュータの有効な活用方法について探り、積極的に取り組んでいくことが望まれる。[図2-1][図2-2]

この節では、授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度と教科別正答率との関連及びそれぞれの活用内容について分析する。

ア 「コンピュータを活用した授業を行っていますか」について

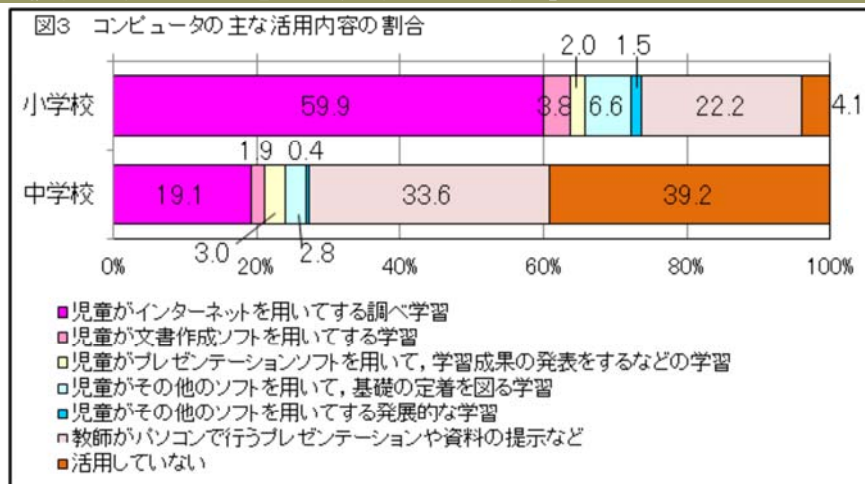


「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答をした小学校教師の割合は58.0%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は10.7%であり、逆に「年に1~2回程度行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は70.6%と高くなっている。中学校は小学校に比べると、コンピュータを活用した授業があまり行われていない傾向が見られる。[図1]



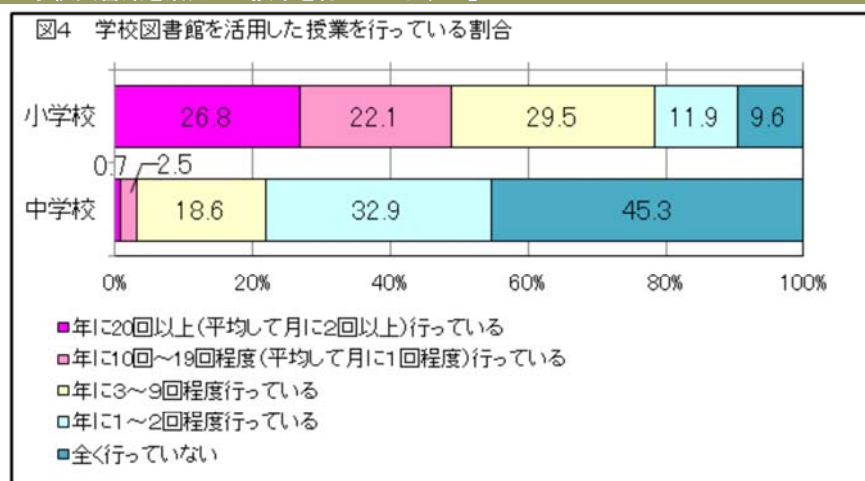
この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校ともに全ての教科において、Aグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校の全ての教科で顕著に表れており、社会と英語においては10ポイント以上、上回っている。[図2-1][図2-2]

イ 「授業では、コンピュータをどのように活用していますか」について

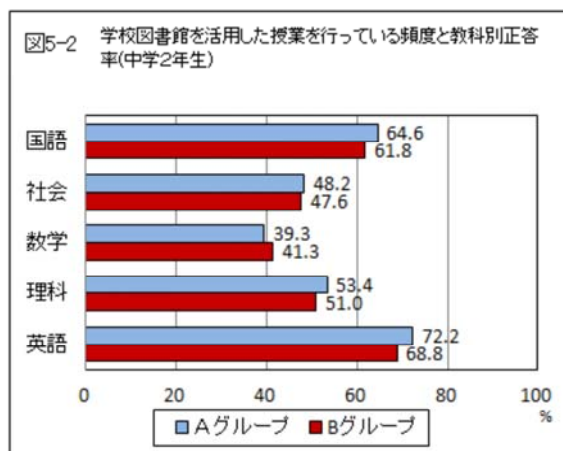
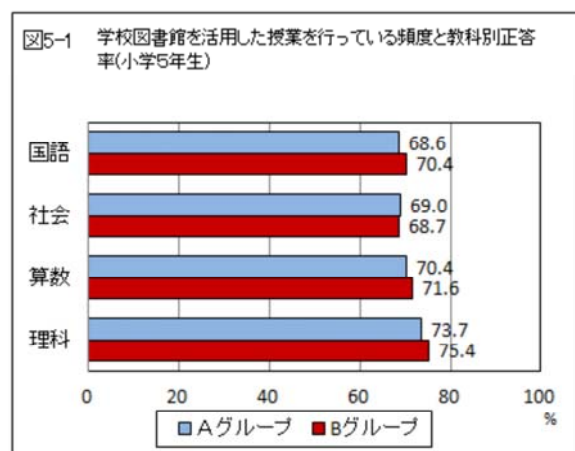


小学校ではコンピュータを活用していると回答をした教師の中において、「児童がインターネットを用いてする調べ学習」と回答をした教師の割合が59.9%と、最も高くなっている。これに対し、中学校では「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など」と回答をした教師の割合が33.6%と最も高く、次いで「生徒がインターネットを用いてする調べ学習」と回答をした教師の割合が19.1%となっている。[図3]

ウ 「学校図書館を活用した授業を行っていますか」について

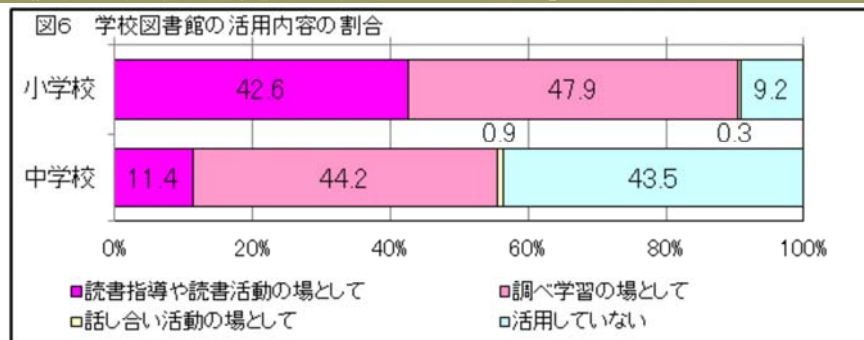


「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答した小学校教師の割合は48.9%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は3.2%であり、逆に「年に1~2回程度行っている」「全く行っていない」と回答をした割合が78.2%と高くなっている。中学校は小学校に比べると、図書館を活用した授業があまり行われていない傾向が見られる。[図4]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、特におおきな傾向は見られないが、中学校では、全体的にAグループの平均正答率が高くなる傾向が見られる。[図5-1][図5-2]

エ 「授業では、学校図書館をどのように活用していますか」について



図書館を活用していると回答をした教師の中において、小学校と中学校ともに「調べ学習の場として」と回答をした教師の割合がそれぞれ47.9%、44.2%と最も高くなっている。次いで、小学校と中学校ともに「読書指導や読書活動の場として」と回答をした教師の割合がそれぞれ42.6%、11.4%となっている。[図6]

○ これからの指導に向けて

コンピュータを活用した授業

平成23年度佐賀県教育の基本方針において、ICT利活用教育の推進が掲げられている。今日の社会の情報化が急速に進展していることを考えれば、児童生徒だけでなく教師の情報活用能力を向上させることは、今後の教育課題の1つであると考えられる。また、今回の調査結果から、ICTを授業へ活用することは、学力の向上に効果が期待できると考えられる。ICTを授業に活用することは、教師の指示を明確にしたり、見せながら話すことで説明が分かりやすくなったり、課題や図を簡単な操作で分かりやすく表せたりすることなど、様々なよさがあると考えられる。佐賀県内の各学校においても、少しずつ電子黒板やコンピュータなどの環境の充実が図られ、公開授業や研究会などが行われている。今後も、教師のICT活用におけるスキルアップ研修や児童生徒への情報モラルに関わる教育なども計画的に行いながら、積極的な活用を推進していくことが必要である。また、学校図書館についても、児童生徒の実態や学習の内容に応じて、学力向上における効果的な方法を探りながら活用していくことが大切である。

最終更新日:2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

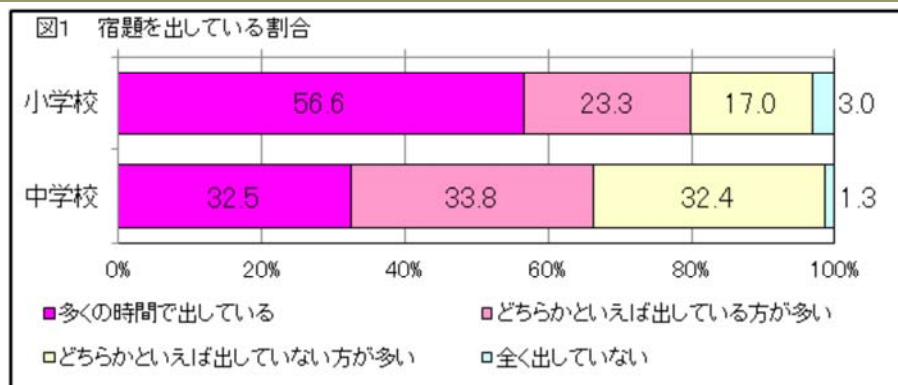
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

3 家庭学習への関与状況

- 宿題については、小学校と中学校とも主に復習的な内容が出されている割合が高いが、予習的な内容を出すことについても、学力向上に効果があると考えられる[図3][図4][図5-1][図5-2]。児童生徒へ与える宿題の内容や出し方についても、学力向上に向けより有効となるように検討していく必要がある。

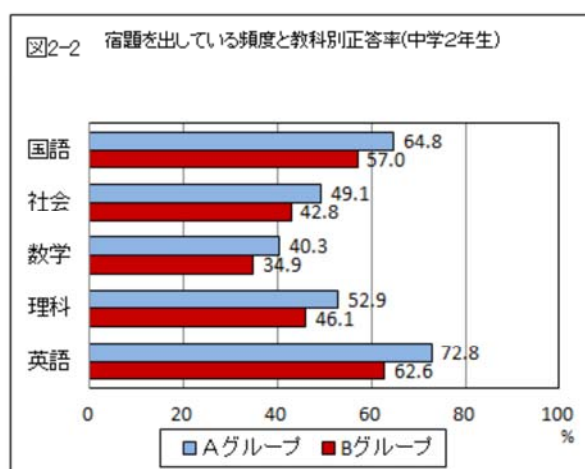
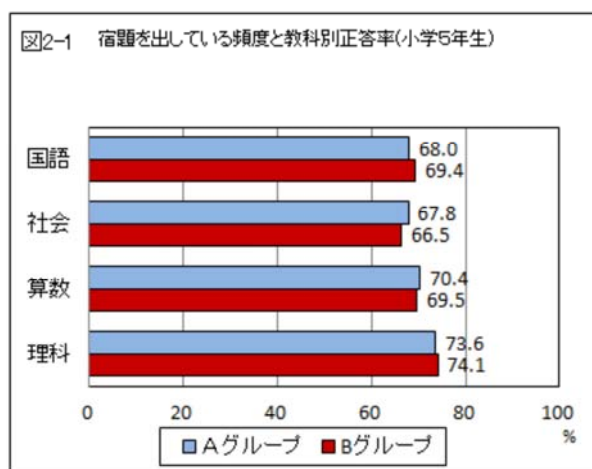
この節では、宿題を出している頻度及び出している宿題の内容(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を分析する。

ア 「宿題を出していますか」について



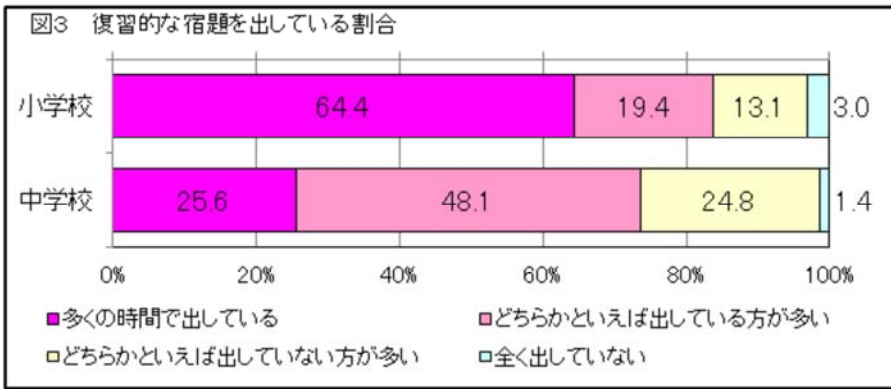
「多くの時間を出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合は79.9%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は66.3%である。小学校教師の方が中学校教師よりも宿題を出している傾向が見られる。

[図1]



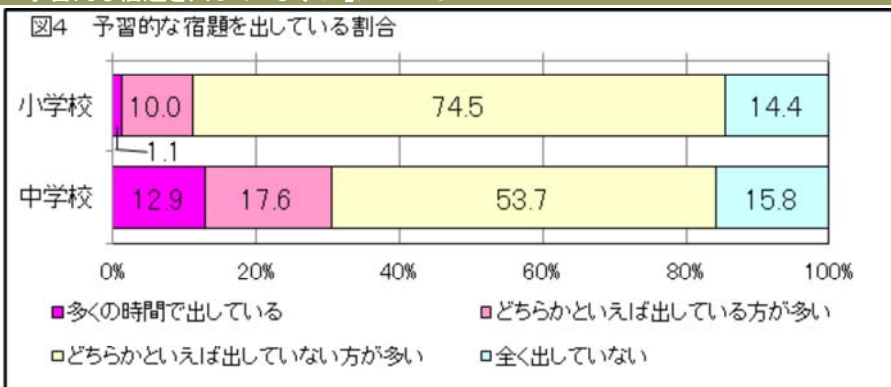
この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、中学校では全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっており、顕著に表れている。特に英語においては、10.2ポイント上回っている。[図2-1][図2-2]

イ 「復習的な宿題を出していますか」について

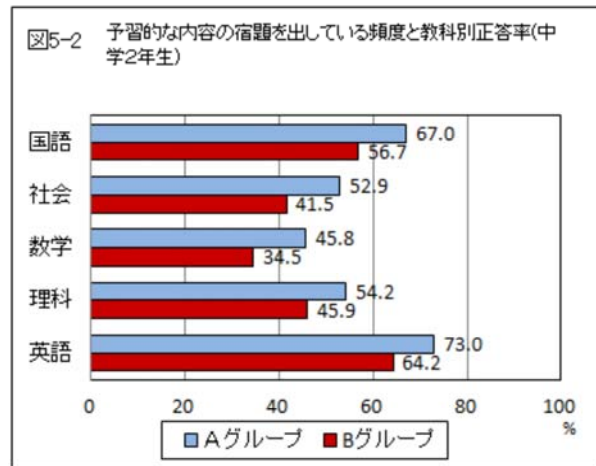
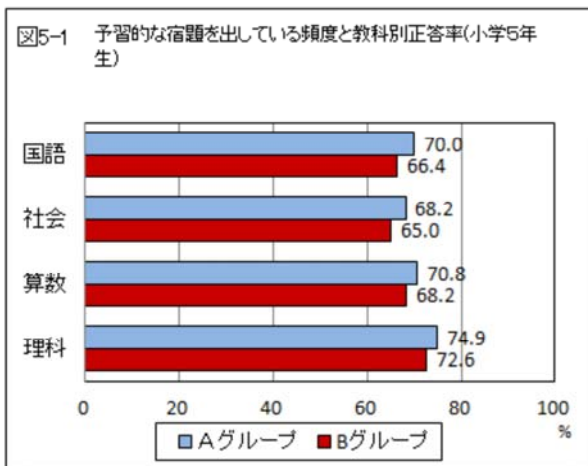


「多くの時間で出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答をした小学校教師の割合は83.8%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は小学校に比べるとやや低いが、73.7%である。図4のグラフとの比較より、小学校と中学校ともに復習的な宿題を出している教師の割合が高い傾向が見られる。[図3]

ウ 「予習的な宿題を出していますか」について



「多くの時間で出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合は11.1%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は30.5%であり、小学校よりも高い結果となっている。[図4]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校とも全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校では全ての教科において顕著に表れており、10ポイント程度上回っている。[図5-1][図5-2]

○ これからの指導に向けて

復習的な宿題と予習的な宿題

小学校、中学校共に、多くの教師が宿題を出しており、その多くは復習的な内容の宿題である。宿題の主な目的については、家庭学習の習慣化や授業における学習事項の定着とされている。そのため小学校教師は、その目的に対する意識は強い傾向がある。その一方で、中学校教師は、小学校教師に比べると予習的な内容の宿題についても出している傾向が見られる。予習的な宿題に取り組ませることは、事前に学習内容に対する自分なりの考えをもたせることになり、授業における児童生徒の主体的な学習活動を促し、自己学習力の育成へとつながっていくものとする。さらに、意図的に予習的な宿題を出すことと授業における児童生徒の主体的な学習活動とを結び付けることが、児童生徒の興味・関心を高めることにもつながり、学習意欲を喚起するための手立ての一つとして有効であるとする。また、復習的な宿題においては、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ることを目的とする内容だけでなく、授業で身に付けた知識・技能を活用して課題を解決させるような視点での内容についても検討していくことが望まれる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

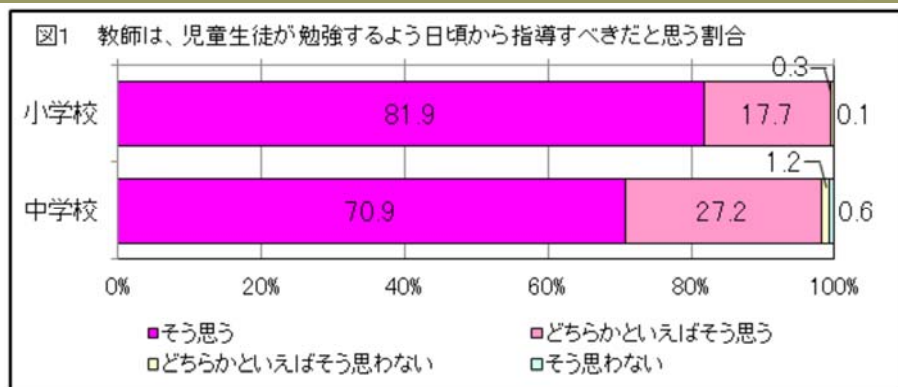
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

4 教師の指導観

- 小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒ができるだけ勉強するように、日頃から指導すべきだと思っている。[図1]
- 小学校と中学校のほとんどの教師が、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思っている。[図2]
- 小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思っている。また、日頃から細かく指導していくことは、学力の向上につながるものと考えられる。[図3][図4-1][図4-2]

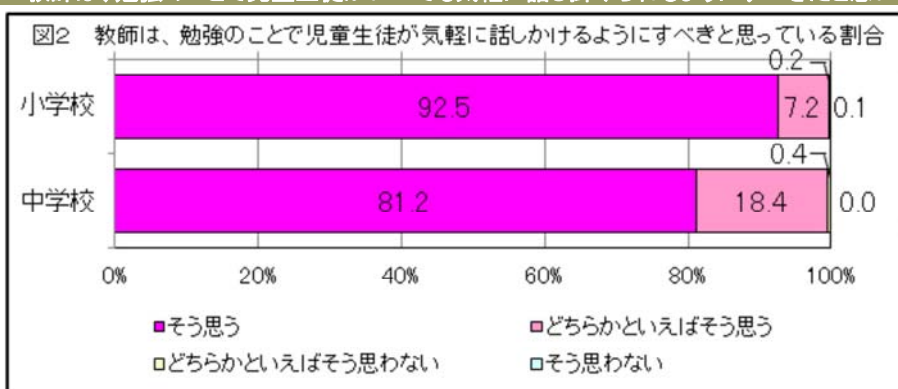
この節では、教師の児童生徒に対する学習指導や生活指導に関わる意識についての質問から、教師の指導観及び学力向上との関連について分析する。

ア 「教師は、児童生徒ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきだと思いますか」について



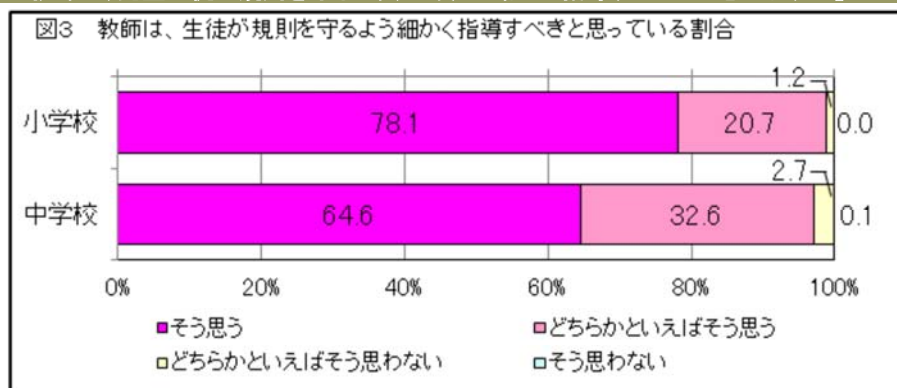
「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は99.6%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は98.1%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきであると思っていることが分かる。[図1]

イ 「教師は、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思いますか」について

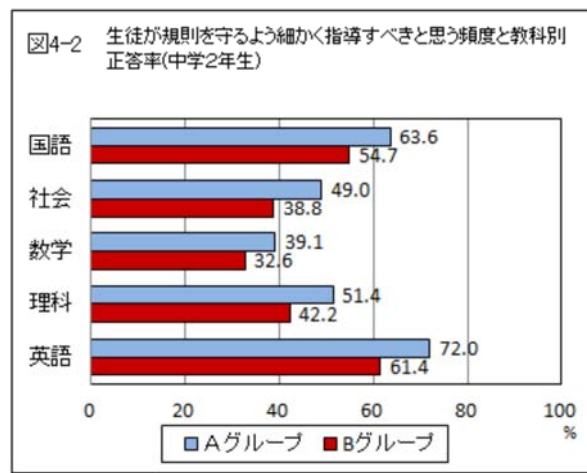
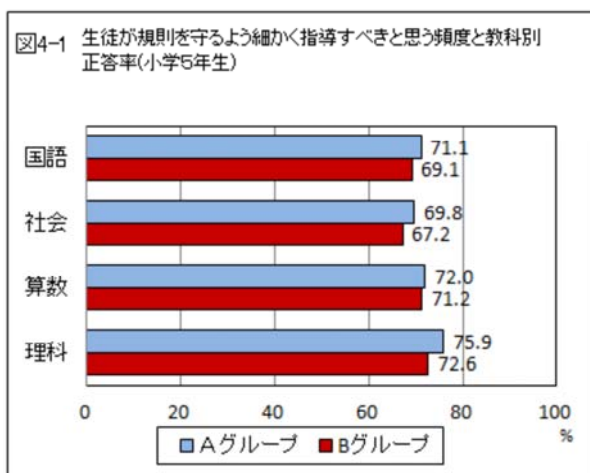


「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は99.7%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は99.6%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思っていることが分かる。[図2]

ウ 「教師は、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか」について



「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は98.8%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は97.2%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思っていることが分かる。【図3】



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校ともに全ての教科において、Aグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校の全ての教科で顕著に表れており、社会と英語において10ポイント以上、上回っている。【図4-1】【図4-2】

○ これからの指導に向けて

学習指導や生活指導に対する意識のもち方について

児童生徒の学力の向上を図る上においては、教師側も目標や向上心をもって、日頃から児童生徒の指導や支援に当たることが、必要不可欠である。日頃の指導や支援の在り方については、児童生徒の状況により常に同様にはいかない場面も多々あると思われる。しかしながら、常に教師側が高い意識をもち、児童生徒の将来を見据えながら学習面や生活面における向上を目指し、指導や支援に当たっていくことが大切である。今回の調査結果からは、ほとんどの教師が日頃から学習指導や生活指導に対し、共通した高い意識をもちながら、指導に当たられていることが分かる。また、【図4】の調査結果から、児童生徒の学校生活に対し、日頃から細かく指導していくことが、学力の向上によい影響を与えていることが分かる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

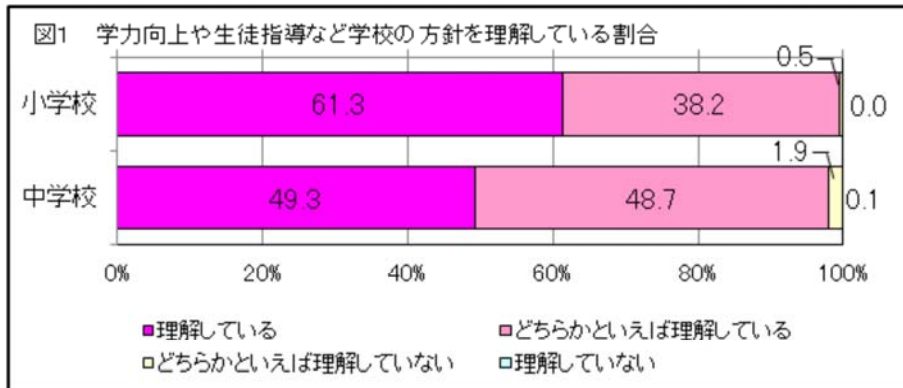
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

5 学校組織のマネジメントに対する意識

- 教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していると回答した教師は9割を大きく上回っている。[図1]
- 教育活動の具体的な内容についての共通理解が図られていると回答した教師は9割を大きく上回っている。[図2]

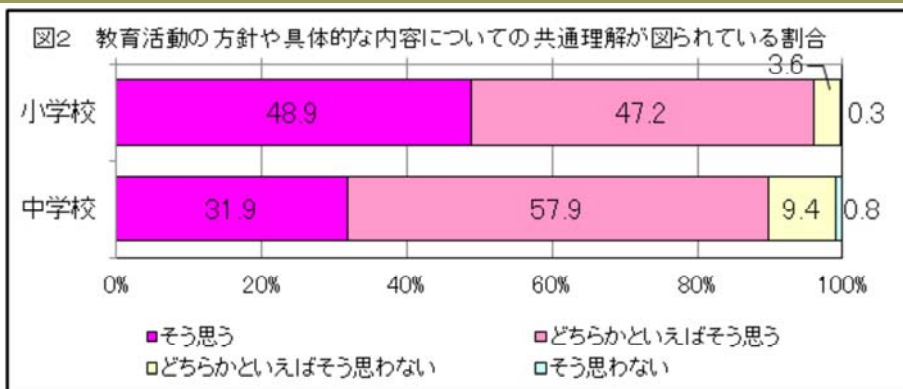
この節では、教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解について問うことにより、教師の学校組織のマネジメントに対する意識を把握する。

ア 「あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか」について



「理解している」「どちらかといえば理解している」と回答をした小学校教師の割合は99.5%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は98.0%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していることが分かる。[図1]

イ 「あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか」について



「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は96.1%である。同じ回答をした中学校教師の割合は小学校に比べるとやや低いが、89.8%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思っていることが分かる。[図2]

○ これからの指導に向けて

学校組織マネジメントに対する意識との関連

指導法の改善、充実を図るためには、学校全体で取り組むという各教師の意識を高めていくことが大切であり、学校組織マネジメントの充実は不可欠である。今回の調査結果を、県全体として学校組織マネジメントの視点から見た場合、おおむね良好であるといえる。これは、教師集団が目的を共有化しており、教師間の連携・協働体制が有効に働き、学校全体で教育に取り組む風土が醸成されていることの表れであると考えられる。

最終更新日： 2011-10-07